



遠山・村垣西蝦夷地日記

12区1班 龍本 英世

1807(文化4)年の江戸幕府の西蝦夷地直轄支配の前年、幕府目付遠山金四郎景晋、勘定吟味役村垣左太夫定行ら一行が、蝦夷地の調査を行った記録が残っています。この調査は蝦夷地の西海岸をソウヤまで行き、その帰途イシカリからユウフツへ抜ける途中、ツイシカリに一泊したと記されています。

その旅行記は、「遠山・村垣西蝦夷地日記」と言い、その日記の中にサッポロ川(豊平川)の流路が大きく変わったという記述があります。それは、「19世紀初め頃からの大洪水で、サッポロ川上流の流れが変わり、それまで小川であった津石狩川がサッポロ川の本流となり、ツイシカリで石狩川と結ぶ船路となった」、「これが、のち豊平川(現・世田豊平川)と呼ばれ、旧サッポロ川はフシコサッポロ川と呼ばれるようになった」というものです。

また、当時のツイシカリには、アイヌの家が3軒で、今回の巡見のために建てられた仮小屋があったと記されています。

1941(昭和16)年に新たな河道が開削され、豊平川の流路は現在のように途中で北に転じるようになりました。寛政年間から1941(昭和16)年までの河道は、旧豊平川、世田豊平川という名で残っています。

ところで、ここに出てくる遠山金四郎景晋は、江戸時代後期の江戸幕府の幕臣であり、1804年のロシア船来航時には幕府を代表してニコライ・レザノフと会談するなど、江戸幕府の対外政策の第一戦を担っていました。その後長崎奉行、勘定奉行などを歴任し、能吏として知られていたようです。

遠山金四郎というと、みなさん時代劇でご存知ですね。入れ墨判官遠山の金さんを思い出すでしょう。遠山金四郎景晋は、あの有名な遠山左衛門尉景元の父親

と言ったほうがわかりやすいでしょう。

ところで、もう一方の勘定吟味役村垣左太夫定行は淡路守で、更に御庭番家筋の村垣本家4代目ということがわかりました。

では、御庭番とは何なのでしょう。それは、1746(享保元)年徳川吉宗の8代将軍就任のときに、紀州家から薬込役16人と馬口之者1人をともなって、江戸城に入りました。その時連れて来た彼らを(御庭番家筋)と定めて、隠密御用に用いたのがはじまりでした。のち、分家が生じて26家となり、その後22家となって幕末にいたったとのこと。将軍から直接の命令を受けて秘密裡に諜報活動を行った隠密をさしています。ただ、諜報活動といっても、実際には時々命令を受け、江戸市中の情報を将軍に報告したり、身分を隠して地方に赴き情勢を視察したりしていた程度だといわれています。その実態としては、大目付や目付を補う将軍直属の監察官に相当する職種だったと考えられています。

しかし、一般にはいわゆる間者や忍者の類だったとする御庭番像が広まっており、時代劇や時代小説等でそのような描写が数多くなされています。



村垣定行の墓(東京)



木製戦闘機 キ 106 と見晴台 5区 西川 信(ペンネーム)

私が見晴台に宅地と建物を購入したのは、今から 34 年前でこの話を聞いた母方の祖父は「あそこは戦争中飛行場があった地盤の良い所だ」と母に話したようだ。

北海道の飛行場と言えば千歳や丘珠くらいしか思い浮かばなかった私は、見晴台に飛行場があったとは信じられなかったが、ある日ウォーキングをしていた時、標柱に行き当たった。

標柱には、「史跡 旧飛行場跡 木製戦闘機と戦争」と記されていた。ああ、これが祖父の言っていた飛行場の跡かと、記憶を思い起こした。

私は情報図書館に行き「木製戦闘機キ 106」という本を借りた。以下は、本の内容を簡単にまとめたものである。

昭和 18 年王子製紙江別工場は閉鎖され、王子航空機江別製作所となり、木製戦闘機の制作が始まった。当時アルミ不足が深刻となり木製戦闘機を造らざるを得なかった。単板を組み、ガゼインという接着剤で合板を作成した。ガゼインとは牛乳に含まれるタンパク質で、これにアルカリや石灰を混ぜると強力な接着剤になった。

昭和 20 年 6 月 11 日午前 11 時北海道産第 1 号キ 106 戦闘機が離陸に成功し丘珠飛行場に向かった。

ただ、江別で制作したのは翼と胴体のみで、金属部分は群馬県太田市の中島飛行機(現スバル自動車)から貨車輸送で取り寄せた。

離陸を見届けた幼年工や女子挺身隊、動員学生、軍関係者など約 2,000 名から喜びの声が上がった。

滑走路は幅 50m、長さ 2,000m で砂利を敷き詰めローラーで転圧し固めた。

機体は木製のため金属機より約 1 トン近く重く、時速は 614 km だった。王子製作所から飛行場までの誘導路が現在も残っている。(図参照)

続いて、2 号機・3 号機も完成し飛行場から飛び立った。

終戦直後、江別製作所には約 90 機以上の木製戦闘機が残っていたが、アメリカ軍に見つかるのを恐れて強制的に破壊処分された。

見晴台という身近な場所に、木製戦闘機の飛行場があったことを知り、今の平和な日本がこれからも長く続くことを願っている。

また、パレスチナガザ地区やウクライナに 1 日も早く平和な日常が訪れることを強く願う。





江別市の木・ナナカマド

4区 森 三步(ペンネーム)

厳冬の白い雪と赤い実のコントラストが目立つナナカマドは、1971年(昭和46年)11月に江別市の木に制定されました。

街路樹や公園樹、個人の庭先にも植えられているので、私たちにとっては身近な木です。(因みに、市の花は菊) 散歩中によく目にしているのので、ナナカマドについて改めて調べてみました。

「赤い丸実と緑色の奇数羽状複葉」



<ナナカマドとは、どんな木>

樹木図鑑から抜粋すると、バラ科ナナカマド属の落葉広葉樹で山地に自生する。高さ10~15mで太さ30~40cm、街路や公園にも植えられている。葉は奇数羽状複葉で互生。白色の花弁5枚の花を多数つけ6月開花。果実は直径5~6mmの球形、9~10月に赤熟する。北海道・本州・四国・九州・南千島に分布するとあります。

主に北海道や東北地方に自生し、本州以南では平地ではなく山地に生える涼しい気候を好む木です。確かに、東京都や京都市では街路樹として見たことはありません。

名前の由来は、材は燃えにくく7回かまどに入れても火がつきにくいということによります。花言葉の「慎重」も、木が燃えにくい性質からきています。漢字名は「七竈」。

<多数の市町村が街の木として制定>

道内の市町村で、街の木と制定しているのは、士別市・旭川市・江別市・室蘭市・奈井江町など多くの市町村があります。

また、街路樹としても各地に植栽されています。街の木や街路樹として選ばれる理由は2点あります。

その一は、春の白花は小さいが沢山穂先となって咲き美しいこと、春夏の若葉や緑葉と秋の紅葉がはっきりしていること、落葉後の冬には珊瑚珠のような赤い丸実が長く残り、一年を通して花や葉と実を愛でることができることです。

その二は、木としてはコンパクトで大木とならないので管理がしやすいことです。確かに、大木のイチョウの街路樹と比較すると理由が納得できます。

<ナナカマドの実と野鳥たち>

実には、保存料と微量な毒成分が含まれているため冬の間も腐らないで枝に残ります。この毒は、冬の寒さで凍結と解凍を繰り返すことにより抜け、野鳥たちが食べられるようになります。

実際、四番通り等のナナカマドは、一月下旬になってからツグミやヒヨドリが群れで食べ、カラスやスズメも食べます。年によっては、キレンジャクの仲間が大群で実に群がり圧巻です。

以前、冬には甘い実になっているのだろうと思い、同時に西洋ではナナカマドの実をジャムにして食べると聞いたので、何本か木の実を食べたことがあります。結果は、どの木の実も苦くて食べられたものではありませんでした。毒は抜けても苦みは残るようです。後から鳥は食べ物を丸飲みするので苦さを感じないことと、西洋のものはセイヨウナナカマドと言って木の種類が違うことがわかりました。実は苦かったけど楽しい思い出となりました。

健康の為の散歩中に、木の花を愛でる楽しさを知りました。江別市の木・ナナカマドは、花も紅葉も赤い実も素敵な自慢の木だと思います。



「実を食べるツグミ」



松浦武四郎と対雁 12区1班 龍本 英世

前回執筆した遠山景晋・村垣の蝦夷地探検調査の後、蝦夷地へ探検調査に入ったのは皆さんご存知の松浦武四郎です。松浦武四郎は伊勢国須川村（現在の三重県松阪市）の下級武士の家に生まれ、13歳から3年間、平松楽斎に付いて儒学を学びました。16歳の時から全国各地を旅するようになり、17歳から9年間は一度も故郷に帰ることなく各地の名所や旧跡を訪ね歩いたようです。そして、長崎滞在中に「蝦夷地はロシアをはじめ、諸外国による侵略的危機にさらされている」との話聞き、1845（弘化2）年28歳になった武四郎は、蝦夷地へ第1回目の探検に赴くこととなります。以降41歳までの間に計6回の調査・探検を行っています。

その6回のうち4回もツイシカリ（対雁）に立ち寄っています。武四郎は立ち寄った土地の様子を日記に書き留めていることから、当時のツイシカリの様子を知ることができます。

1846（弘化3）年に松浦武四郎が北見・知床巡視の帰途に立ち寄った際の『再航蝦夷日誌』に、ツイシカリについて書かれています。ツイシカリは石狩川筋の中では魚が多い場所で、この石狩川に合流するツイシカリ川（豊平川）で千石もの量となる鮭が上ることをアイヌの人たちから聞いているのです。

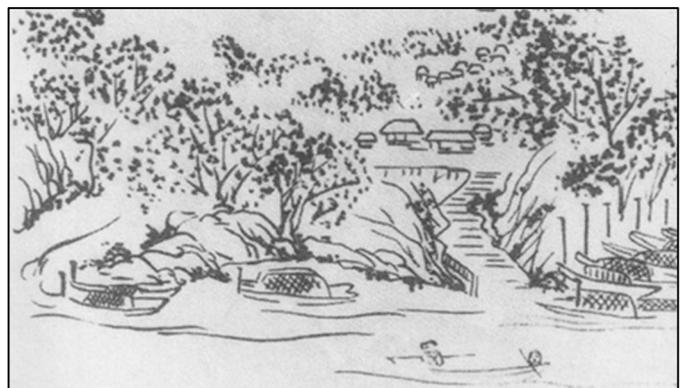
当時のツイシカリにあった建物は、茅葺屋根の大きな旅宿所を兼ねた番屋やいくつかの蔵、その傍にある弁天社、そして番屋の後ろにアイヌの小屋が5・6軒あると書かれています。また、アイヌ三役の家として、「酋長壺軒、小使壺軒、土産取壺軒」と書かれています。

また、アイヌの家では、家ごとに罌・鷲を養い、梟も飼っているとして、特に「神の鳥」である梟を養うことによって痘瘡（天然痘）の神はやって来ないと信じていたということです。

天然痘は元々和人の進出によってアイヌ社会にも伝染した伝染病で、1817（文化14）年に石狩地域で大流行し、アイヌの人たちが多数死亡したとの記録が残っています。

また、この土地は肥沃で石が混じっていない黒土なので、大豆・隠元豆・南瓜・茄子・大根・稗・馬鈴薯が良く出来たとして後に、「然れども、ここは少しばかり夷人小屋より奥の山に開きて、通行の人数（役人）見する事を甚だ忌めり、是松前家から堅く耕作を制するが故也。」と書かれています。この記述から、アイヌの人たちが松前藩の農耕禁止に気兼ねしながら、密かに役人や番人などに見えないような山の奥で畑作を行っていたことがうかがい知れます。更に、産物となる鮭以外に、大正時代まで遡上していたと言われる大きなチョウザメ、それにチカ、更に武四郎が川底に塩気があるからであろうとしたヒラメやソイまで獲れていたと記述されています。

この旅は、この後エベツブトよりエベツ川（現、千歳川）に入り、島松を通り、勇払へと抜け、江差に戻っています。



ツイシカリ之図 「再航蝦夷日誌」より

その後、武四郎は1869（明治2）年6月に「蝦夷開拓御用掛」となり、蝦夷地を「北海道」（当初は「北加伊道」）と命名しました。更にアイヌ語の地名を参考にして北海道各地の国名・郡名を選定しています。